

保育者養成校における 実習を中心とした科目間連携に関する研究

A Study on the Relationships for the Internship
in the Training Programs for Childcare Teachers

柴田 卓* 伊藤 哲章* 猪股 照子*
Suguru shibata Tetsuaki Ito Teruko Inomata

ポールエドワードバーナミィ* 仲西真美子* 三瓶 令子*
Paul Edward Vonnahme Mamiko Nakanishi Reiko sanpei

This research summarizes cases and cooperation among the teachers regarding collaborating subjects, as a result, the following five viewpoints became clear.

First, it's understood that the students are lacking in the practical skill of controlling children in a classroom. Secondly, knowing this tendency of the students before internships, teachers will discuss the topics needed for learning which will leave them better organized; these discussions are valid in guiding the students to be better prepared for training. Thirdly, students lack confidence with things they learned in music and can't yet utilize these music skills sufficiently when doing initial internships. Fourthly, while studying English, the students actually proved through demonstration that the child care practice can utilize English, dance and songs by cooperating together in preliminary activities in the classroom. Lastly, the students felt appreciation while watching the children practice and play in the yard, in the corridors and while using games throughout the kindergarten. To summarize, the child care environment for the students was enjoyed by more than half the students. Such a viewpoint from this study makes learning and the practice richer while improving the guidance and overall child care practice skills of the students.

1. はじめに

保育者養成校において、実習という営みは大学での学びと保育実践を繋ぐ重要な役割を果たすものである。大学での学びを実習に活かし、実習での学びを大学で深めることは、学び続ける保育者を育てる保育者養成校の使命ともいえる。学生にとっては、保育実践力としての基礎

* 幼児教育学科

をどれだけ修得することができたか、あるいは自身の活動を省みて何が今後の課題となるかなど、学びの目標を再設定する機会ともなる。しかし、必ずしもこの実習に向けた取り組みに対し、養成校教員が一丸となって連携を図っているとは言えないのが現状ではないだろうか。

平成25年度全国保育士養成セミナー報告書の中で「それぞれの教科を自らの専門性だけで進めるのではなく、他の分野同士とどのような関連性があるのかを養成校の教員同士がお互いに自覚する必要がある」¹⁾との指摘がある。保育実践では、様々な要素が単一的ではなく横断的かつ複雑に絡み合いながら遊び、学び、生活として展開されている。実習においては、保育経験を有する実習担当者がそのほとんどを担うことが多く、授業内では見えてこない保育の質、専門性以前の基本的な礼儀や文章力、コミュニケーション力や生活力の低さなど、大小さまざまな課題や問題が表出することも珍しくない。他の教員がその全体像を把握するためには、実習を中心に据えた科目や教員間の連携が必要不可欠である。同報告書には「各教科から得られる学びを教員間で共有し、授業と実習との有機的な連携を養成校教員がチームとなって探ることで、学生の保育の理解が深まる」¹⁻²⁾としている。従って、実習事前指導や事後指導における科目・教員間の連携は、保育者養成校における喫緊の課題といえよう。

こうした背景から、K大学短期大学部幼児教育学科では1年次と2年次の実習後に担当者による面談およびアンケート調査を実施し、実習に対する学生の傾向を調査した。それらを踏まえた上で、実習に向けて教員間や科目間で連携して取り組んでいる事例を整理し、その一部を報告しながら考察を加え、保育者養成校における実習に向けた科目間連携に関する検討を行うことを目的とした。

2. 研究方法

はじめに、保育者養成校における科目間連携の取り組みを調査し、本研究の独自性を述べる。次に、K大学短期大学部幼児教育学科の取り組みに関して事例をもとに考察を加える。

1) 先行研究

2) 実習事前事後指導における科目間連携の必要性

実習担当者によるアンケート調査「2年次保育・教育実習後のアンケート」

①予備調査 2017年4月12日(1年次の実習を振り返って)

対象：K大学短期大学部幼児教育学科2年生140名

②本調査 2017年9月14日(2年次教育・保育実習を振り返って)

対象：上記と同様で2年生140名(本研究で取り上げた設問への回答数は、123名)

※いずれも、その趣旨等を事前に学生へ説明して実施した。

3) 「実習事前事後指導」・「保育表現技術体育Ⅰ」・「音楽・器楽・表現科目」の連携

- 4) 「英語教育コミュニケーション」と「保育表現技術体育Ⅰ」の連携
- 5) 「保育内容演習生活と環境Ⅱ」・「保育表現技術体育Ⅰ」・「附属幼稚園」における連携
- 6) まとめ

3. 先行研究

神垣ら(2010)は、倉敷市内の短期大学1年生を対象に、領域「言葉」と領域「表現Ⅱ」(造形分野)において紙芝居制作の連携授業を行った²⁾。シラバスには紙芝居制作、発表会が組み込まれ、発表会では、領域「言葉」の授業で学んだ読み聞かせの技術の復習を兼ね発表し、まとめとして振り返りシートを用いてのフィードバックを行った。学生の振り返りでは、自己の性格や造形的技術について言及している一方、領域間の連携に関する考察がほとんど見られず、スケジュール上では表面的に連携授業をしても、学生が学ぶべき内容としての領域「言葉」と領域「表現Ⅱ」との連携は不十分となった。各々の授業が独立した状態のままであったこと、また、その結果として教員側からの領域間の関連性や領域をまたいだ総合的視点の重要性についての指導が不十分であったことを明らかにしている。学生に領域間の関連性や領域をまたいだ総合的視点の重要性を伝えることは難しいため、今後相互の授業の役割、連携授業で紙芝居を制作することの意義といった共通理解項目を定めるために、より密な話し合いの機会を設ける必要があると述べている。

広渡ら(2012)は、S短期大学で学生の2年間の学びを効率よく進め、学習効果を高めるために、領域「言葉」に関連する科目「保育内容言葉」と「保育表現技術Ⅲ」の科目間連携を行った³⁾。「保育内容言葉」で導入した絵本の読み聞かせ、ことば遊びの実践(実技)について、「保育表現技術Ⅲ」で実習準備を兼ねてさらに実践を重ねることで、意義と実践上の留意点などを確認する等、ある程度の連携ができる授業内容となった。しかし学生が確かな専門性と実践力を身につけるためには、授業を行うだけでなく、個々の学生の学習状況、技術の習得状況等を把握し次に繋げて学習を促進させる等の連携がさらに必要である。今後の課題として、個々の学生の1年次の学びを2年次にどのように繋げ、促していくか、具体的な連携方法の検討を必要としている。また同大学では、実習関連科目が段階的に進められ、特に「保育表現技術Ⅲ」では、実習を念頭に置き授業内容を工夫しているが、実習前の準備と実習後の振り返りに繋げるには、各実習の「事前事後指導」科目担当者との連携が必要であると述べている。

智原ら(2013)は、K大学で、保育現場での実践的能力を習得した保育者養成のために、多角的な思考力を育成し専門性を理解した上で固定化された教科枠から脱却することを目的として、クロスカリキュラムの概念を用いた「図画工作」と「幼児体育」の教科間を連携させた⁴⁾。平成19年度後期に『目的志向型』の連携授業の取り組みとして、「図画工作Ⅰ」「幼児体育Ⅰ」

で行った。“まと”を題材とし、「まと制作」を「図画工作Ⅰ」で、「まと当て」を「幼児体育Ⅰ」において取り上げ、「まと制作」を保育者の教材研究、「まと当て」を遊びの実施部分およびまと教材としての検証とし、活動に連続性を持たせたものである。この連携授業を経験した学生は、一つの科目で学んだことだけを参考にするのではなく、実際の制作時間とは異なる授業での学びを思い出し、活用しながら考えることができ、また、活動を通して体験に基づく分析や考察の深まりが見られ、それぞれの教科目での効果が高まったとしている。平成21年度には、平成19年度の連携授業の更なる発展として、「図画工作」「幼児体育」それぞれの科目特性を生かした活動に展開した『テーマ展開型』の連携授業を行った。この連携授業を経験した学生は、カリキュラム上個別に行われている教科目の間に関連性があることを理解することができ、自分たちが体験したことをもとに生活体験と結びつけるなど保育の教材を総合的に扱うきっかけができたとしている。これらのクロスカリキュラムとしての取り組みは、単一教科目では体験できない学生の学びが見られ、保育現場での実践力育成に有効であると述べている。

松山(2010)は、S大学短期大学部保育科で、「保育実践力」の基礎を培うために「保育実践演習」と「教育実習指導Ⅱ」の科目を連携させた⁵⁾。「保育実践演習」を核に科目間の連携を行うことでこそ、保育者志望全学生に学びの場を提供できるのではないかと考え、保育案作成と教材作成は「教育実習指導Ⅱ」、模擬保育を「保育実践演習」で行うこととした。この連携授業の特徴は、学科教員全員が指導にあたること、今までにはできなかった異学年の交流や教え合い・学び合いといった活動、学外の地域の保育現場との連携ができることである。学生は連携授業で実施している「模擬保育」を学外実習前に経験することで、自らの保育への考え方を見直したり、模擬保育終了後の情報交換を通して、模擬保育で自らが行った保育よりも友人の模擬保育に興味を示し実際に保育現場で行っている。これは、養成機関における科目間の連携や保育現場との連携が、学生の保育実践力の基礎を培うために有効な学びの場を作り出していることが明らかである。今後の課題として、カリキュラム構成のみで保育者を志す学生全員が保育実践力の基礎を培うことを考えていくだけではなく、科目間・教員間の連携と、保育への意識が低い層などへの援助も含めた、生成されるカリキュラムのあり方について探索する必要があると述べている。

ここでは、4つの先行研究から科目および教員間の連携やその効果について着目した。特にS大学短期大学部保育科の「保育実践演習」と「教育実習指導Ⅱ」の科目連携⁵⁾は、全教員が関わるなど、示唆に富む内容である。本研究は、実習を中心とした複数科目における連携の可能性および教員間の連携を取り上げている点で独自の視点といえる。

4. 科目間連携の事例と考察

1) 実習事前・事後指導における関連教科との連携の必要性

K大学短期大学部幼児教育学科では、1年次の実習後と2年次の実習後にアンケート調査を実施している。平成29年4月に実施したアンケートを予備調査として自由記述で回答してもらい、その上位を項目に設定し、2年次の実習後のアンケートとして実施した。例えば、1年次の実習後において、「一番苦労した点は何か」という自由記述の上位5項目は、指導案作成、実習日誌、保育者との関わり、教材準備、子どもとの関わりである。

平成29年9月(2年次の実習後)に実施したアンケート結果の一部が図1から図6である。図1の「実習中に一番苦労した点は何か」という設問に対しては、指導案の作成と実習日誌の記録がそれぞれ41%と全体の82%を占めている。しかし、図2の「実習を通して、日誌に記録する視点や内容を理解することができましたか」という設問に対しては、とてもそう思うが15%、そう思うが78%と全体の93%が日誌を書く際の視点や文章力の向上を実感していた。

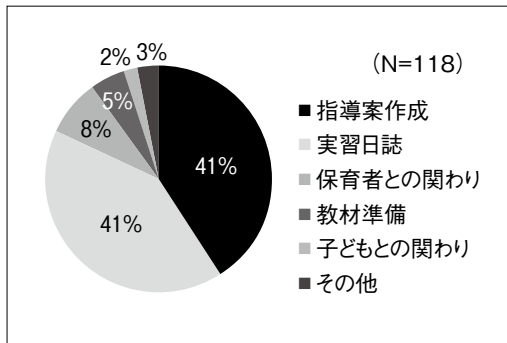


図1 実習中に一番苦労したことは何か

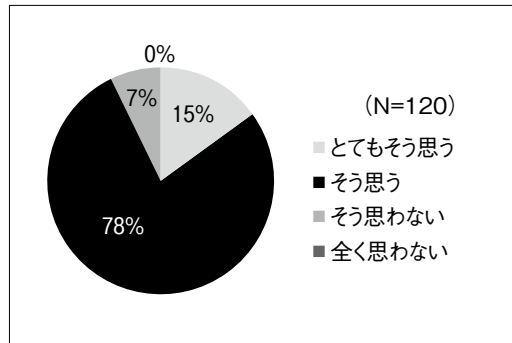


図2 実習を通して、日誌の視点や内容を理解できた

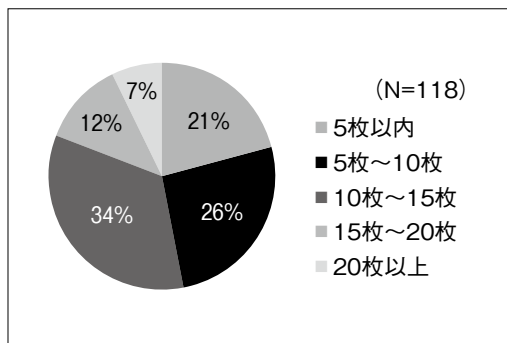


図3 すべての実習で合計何枚の指導案を作成したか

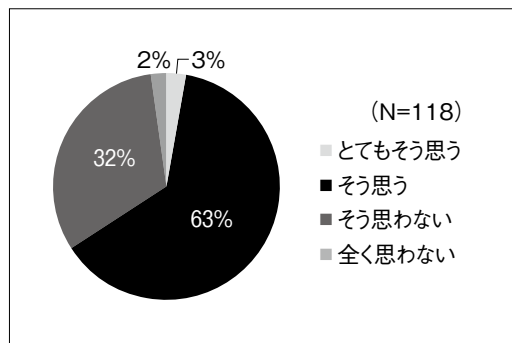


図4 満足のいく指導案が作成できたと思う

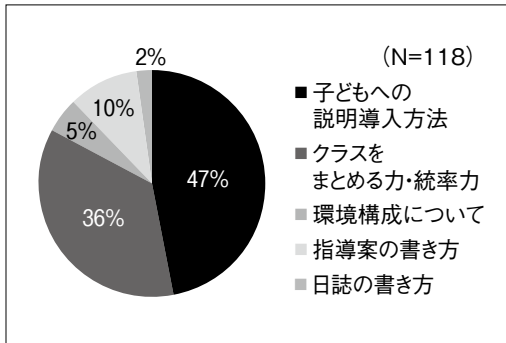


図5 実習前に準備しておけばよかったこと
その1「保育実践力に関連して」

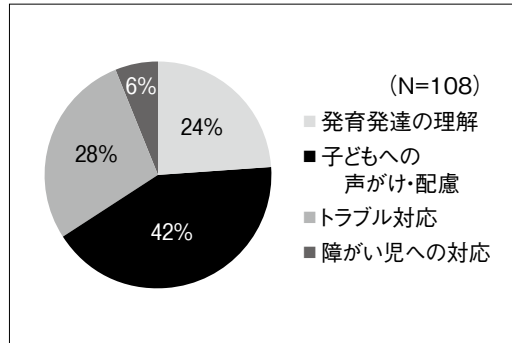


図6 実習前に準備しておけばよかったこと
その2「子ども理解に関連して」

図3の「すべての実習で指導案を合計何枚作成しましたか」という設問に対しては、10枚以上作成した学生が全体の53%を占め、その内15枚以上作成した学生は約20%にも及んだ。図4の「満足のいく指導案が作成できたと思う」という設問に対しては、そう思わないが32%、全くそう思わないが2%であり、全体の約35%の学生が否定的な回答であった。さらに、実習を振り返って自身の課題を明確にする質問として設定した図5の「実習前に準備・学習しておけばよかったことは何ですか①」では、子どもへの説明・導入方法が全体の47%、クラスをまとめる力・統率力が36%と高い数値を示した。子ども理解に関連して設定した図6では、子どもへの声かけ・配慮が全体の42%で、続いてトラブル対応が28%、次に発育発達の理解が24%と続いた。これらの結果から、苦勞していた実習日誌の記録に関しては、自身の成長を実感し、指導案の作成に関しては3割の学生が不安や課題としていることが見えてきた。図5からは、一斉指導における説明や導入・展開に関連した実践的なスキルに課題があることも見えてきた。これらの結果は、2年生に対しては実習事後指導において卒業までの新たな課題として取り上げ、これから実習をむかえる1年生に対しては、実習指導を中心に据えて教員および科目間で連携しながら意図的に改善に繋げることが重要である。

2) 実習事前事後指導との連携

K大学短期大学部幼児教育学科では附属幼稚園実習を出発として、学外幼稚園の観察参加実習・保育実習Ⅰも1年次で体験するシステムであり、学生にとってはそれまでの学校生活とは異なる体験に、戸惑う姿も多く見られる。学生は、実習に参加する際に、さまざまな手続きや注意事項、また実習先との打ち合わせ等、普段の授業では体験することのない社会性をいやがおうでも身に付ける必要に迫られる。これらの内容は、大人の社会では常識と思われることも多々あるが、短大の1～2年生にとってはきわめて緊張を強いられる体験であろう。実習に送り出す養成校の教員は、このことを踏まえ学生がどの事項でつまずき、戸惑っているのかをき

ちんと見極め、丁寧に指導をしていく必要がある。現代の学生は社会体験が乏しくなっているとされて久しいが、このことから、実習は実習担当者による指導にお任せの状態では当然成り立たないことが明白である。養成校は実習を中核として各教科が連携し、実習に向けて学生を支援していく体制が必要である。以下に実習事前指導における概要と保育表現技術科目との連携を取り上げる。

実習事前指導では、はじめに新教育要領・保育指針・幼保連携型認定こども園教育保育要領の改訂が平成30年度に施行されるにあたり、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿・10の項目」を学生に伝える。それを踏まえて、学生が授業の中で取り組んだ活動を「実践記録」(図7)に書き溜め、さらにその中から「教育実習指導計画」(以下指導案)に落とし込んでいる。例えば、図8のように附属幼稚園実習に向けて作成した自己紹介ブックや七夕製作を行った際に、「題名」「ねらい」「内容」(図や文章)「声かけ」の4項目からなる実践記録に記入する。子どもたちにどのような言葉かけを行うと良いか、記入時に考えをまとめて文章で整理させている。その際、早口にならない、分かりやすい言葉で話す、はっきりと語尾まで話す、子どもの顔を見ながら笑顔で演じるなど、具体的なポイントを説明している。初めは、自由な発想で記入することを第一にしている。



図7 七夕飾りの実践記録

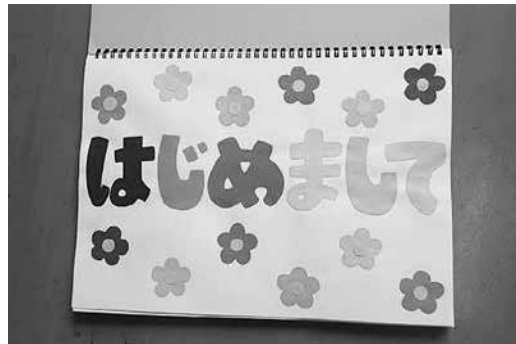


図8 自己紹介ブック

指導案における「環境構成」や「子どもの活動」への記入においても、実践記録を見ながら記入することができる。「援助」及び「配慮点」に関しては、子どもたちの反応や言葉、動きなどを想像しながら指導案を作成し、他の授業で学んだ年齢の特徴や自身が想像した様子と附属幼稚園実習での子どもたちの様子を重ねながら発達の理解を深めるようにしている。学生たちの実践記録は授業の中で発表を行い、他の学生の発表を見ることで、導入の部分や子どもとの関わり方を考える機会にもなっている。また、両方の記録により、実際に行った遊びを子どもたちの言動から発展させたり、保育内容を膨らませたりすることができ、留意点や援助の言葉を考えるきっかけともなっている。

こうした授業で取り上げた内容を指導案作成に向けて書き留める取り組みは、他の教科でも行われている。保育表現技術体育Ⅰにおける「ポートフォリオ」の作成である。授業担当者が開発した教材⁶⁾に、毎回実施した運動遊びを振り返りながら書き込むという内容である。

事前指導の授業だけで取り上げる保育活動には限りがあるが、表現系の授業で取り上げたことも実践記録のようにすぐに見直して活用できるように書き留めておくことで、学生は実習でも保育現場でも役立てる事ができる。具体的な連携としては、体育Ⅰでポートフォリオをもとに作成した指導案を授業担当者と実習担当者の合同で添削するようにしている点である。教員同士が指導案作成における事例をもとに話し合いを繰り返すことで、授業担当者が気づかない「話し言葉」や「ねらいの曖昧さ」など、学生の課題や傾向を共通理解することができ、授業改善に活かすことも可能である。

保育表現技術器楽Ⅱにおいては、実習事後指導として2年生が教育実習Ⅳの終了後にレポートを作成している。その内容は、授業で取り上げた表現活動に加え、部分実習や総合実習で取り上げた活動においても取り上げ(詳しくは次の節で取り上げる)、実習担当者もそのレポートを確認し授業担当教員と共に実習での学びを把握するようにしている。実習後ということでは実感を持ちながら様々な視点で振り返ることのできる学生と、そうではない学生の差が大きいことも見えてきた。日誌の記述の仕方が経過記録や抽象的な記入になっていなかったかなど、振り返りを通して気づくことは実習後の大きな学びとなり、次の実習へのステップともなる。器楽の授業担当教員とは頻繁にこうした意見を交わし、様々な課題を共有している。例えば、言葉で簡潔に表現することとそれを文章化する困難さに対して、日々の学生生活や授業の中で積み上げていく必要があることを共通理解した上で、学生に接している。

実習後の振り返りで学んだことは、自分自身の感性を磨くことにも繋がり、実習という大きな学びの場で経験したその重みを感じ取ることが大切である。そのためには、実習前の準備や学習の段階で、学生が実習に対して受け身な姿勢ではなく、実習に対して前向きになれるような教員のサポートが大切である。実習を中心にした連携を考える際には、科目間における連携に加え、学生の課題や傾向などを把握し十分に話し合いながら指導の在り方や方向性を統一する等、総合的に教員間の連携を図ることが必要不可欠である。そのことが学生にとっての最善の利益に繋がることを自覚する必要があるのではないだろうか。

3) 音楽と実習との連携

領域表現と実習

実際に実習が始まってまず必要とされるのは、自分が参加する実習園の子どもをしっかりと観ることである。子どもと子どもの関係性、子どもの発達の状態、子どもと教師の関わり、保護者との関係性等々、実習生自身が観る力を問われる。このことは保育現場でしか体験できない

し、学内の授業で一番手の届かない場面と考えられ、養成校の姿勢も問われることとなる。言い換えると、事例等を通してこのことを学内の授業できちんと認識させることが、実習生の緊張を緩和することに繋がっていくと思われる。学生は、以下に述べる保育の内容をまず意識しがちであるが、実は子どもの姿を見とる事こそ実習生には大切である。保育現場は子どもにとって生活経験の場であり、さまざまな経験を通して学んでいく場である。これらの経験は5つの領域として扱われ、それら5つの領域の中の1つとして表現も位置付けられている。教科としての音楽は、K大学短期大学部幼児教育学科のカリキュラムでは「保育表現技術 音楽」・「保育表現技術 器楽」として組まれている。一方保育現場においては、音楽は領域表現の内容に含まれており、養成校においても領域表現は、子どもの表現に関わり、直接保育現場と繋がる内容として位置付けられる。

領域表現に関しては「保育内容演習 表現と創造」の科目名で実施しており、表現と創造Ⅰは、1年次後期、同じくⅡは2年次前期で開講している。K女子大学短期大学では6月に2週間幼稚園実習(本実習)が入っているので、「表現と創造Ⅱ」の数コマは、これに向けての準備の時間としてシラバス上にも入っており、筆者は主に音楽表現について実施している。以下に教育実習Ⅳ(幼稚園実習)に向けて学生に伝えている内容を記してみる。

教育実習Ⅳ(幼稚園実習)に向けて(音楽表現)

I 打ち合わせ時

- ①現在実習園の子どもがあそびの中でどのような音楽表現遊びをしているか、聞いてくる。
例：手あそび、季節の歌・行事の歌等
- ②出来るだけ実習生も、それらを練習していく。楽譜が手元に無い場合は、教員の研究室に来室し探してみる。但し、園独自の曲(園歌等)については、遠慮せず楽譜のコピーを頂いてくる。
- ③自分の力量を判断し、あまりにも課題が多い場合は、その旨をきちんと伝え減らして頂く。但し、必ず少しでも努力をしていくこと。(初めからピアノは苦手ですなどと豪語しない)

II 実習時のヒントと準備

- ①手あそび
- ②物を使って歌う歌：ペープサート・パネルシアター・落とし絵・絵本・紙芝居
- ③一緒に歌う歌：できればピアノ伴奏を付けて
- ④動きながら歌う歌：ジャンケンランドセル・はじめまして・おしゃべりなアヒル
- ⑤導入について：各活動に入る前に、集中させたり、活動内容を期待・予測させたりして、活動がスムーズにいくようにすること。落ち着いて、楽しく、丁寧に
- ⑥新しい教材に取り組む時 (責任実習に向けて)

- ・必ず実習生が歌って聞かせること。
- ・良く届く声で、丁寧に、笑顔で、楽しく、繰り返すこと。
- ・部分実習時に、同じ曲を少しずつ繰り返し歌ってあげると良い。

⑦総合的な活動の例：「手作りタンブリンで遊ぼう」

※指導案は、事前に必ず担当の先生に見て頂くこと!! 失敗を恐れないで!!

以上の内容を伝え、模擬保育にも繋げている。また実習終了後には、以下のような「振り返りレポート」を記載してもらっている。

教育実習Ⅳを終えての振り返りレポート（音楽表現について）

I. 部分実習、または責任実習で実施した音楽的活動はどのような内容ですか？

- ①教材タイトル(手あそび、幼児曲、リズムあそび、パネルシアター等) 【20点】
- ②具体的な内容(どのような場面で、どのように実施したのか等) 【30点】

II. 自分の技術についてどう感じましたか？

- ①届く声で、正しい音程・リズムで歌うことができたか 【15点】
- ②ピアノ伴奏や、あそびの中でピアノを弾く機会を設けたか 【15点】

III. 今後、保育実習や就職活動(就職後も含めて)に向けて努力すべき音楽技術は、何だと感じましたか？ 【20点】

特に、振り返りレポートから分かったことは、学生が実践している内容の薄さである。1年半における学びが学生の中に浸透せず、自信がないことから、学んだ内容が実践へ繋がらないことが分かってきた。このことは、単一教科のみでできることではなく、領域すべてで整合性を図りながら学生の中へ総合化され、伝えていかななくてはならない。

4) 「総合英語コミュニケーション」と「保育表現技術体育Ⅰ」の連携

近年、実習巡回で施設を訪問する度に、英語教室や英語を取り入れた保育活動を目にする機会が多くなってきた。保育者養成における英語科目は、今後ますます実践的な内容が求められる。K大学短期大学部幼児教育学科においては、英語担当者と体育担当者間で実習に向けた教材研究の協同実施を検討した。はじめに、担当者間でお互いのシラバスを見直し、また授業を公開するなどして、具体的な可能性を探った。その結果、いずれも1年次の前期科目である「総合英語コミュニケーション」と「保育表現技術体育Ⅰ」で連携することが可能であることが分かり、「保育表現技術体育Ⅰ」の第3回・4回で実施した伝承遊びを「総合英語コミュニケーション」の第11回・12回で取り上げることにした。具体的には、保育表現技術体育Ⅰで実践した「かごめかごめ」と「はないちもんめ」を総合英語コミュニケーションの第11回で英語に翻訳し、第12回に英語で実施するという内容である。直ちに実習に繋がるものではないが、それぞれの科目や分野において楽しく英語を取り入れるという視点は、実習における教材研究

や将来の保育実践において役立つものである。今後より一層こうした連携を進めながら学生の学びを深める努力と授業改善に活かしていきたい。以下に、英語の担当者による実践の報告及び考察を述べる。

学生たちは慣れない英語での取り組みにも関わらず、子どもに戻ったかのように歌いながら踊り、伝承遊びを楽しむことができた。学生たちが伝承遊びの歌詞を自ら英語に翻訳した。何度も歌いながらメロディーに合わせて単語を選ぶなど、学生同士で考えながら能動的に取り組むことができた(図9-12参照)。



図9 「かごめかごめ」を実施している様子



図10 正解して喜ぶ学生の様子



図11 「はないちもんめ」の様子



図12 どの子が欲しいか相談している場面

教育の異なる専門分野における共同学習や研究を学際的研究 (interdisciplinary) という。現在の教育は、一つの科目や分野を専門的かつ単一的に享受することが一般的であるが、いくつかの科目や分野を重複させた方が学生にとってメリットになる場合もある。今回の取り組みは、伝統的な歌と動き(ふりつけ)が一体化した日本の伝承遊びに着目し、そのメロディー、動き(ふりつけ)、その意味合いを保ちながら歌詞を英語に転換し、英語教育と幼児体育の二つの分野を連携させた。伝統的なメロディーが言葉と言葉の間を埋める鍵となり、学生は伝統的な動き(ふりつけ)や歌詞を、楽しみながら翻訳した。この取り組みを通して、日本の伝統的な歌

と英語をいかにうまく組み合わせるかというこれまでにない課題に直面しつつも、学生たちは楽しみながらも能動的に取り組んだ。このプロジェクトを成功させるためにこの過程が重要であった。はじめに、日本語で「はないちもんめ」と「かごめかごめ」を実体験し、次に日本語の言葉に当てはまる英単語を探して選んだ。母国語ではなくても、伝承遊び自体には小さい頃から慣れ親しみ、すぐに昔を思い出して楽しみながら取り組むことができた。

遊びを伴う能動的な学習と講義のような一方的な学習には、大きな違いがある。その遊びの中に学習に役立つ新しい教材や人に説明するような機会が含まれるようであれば、有効な学習と言える。幼児体育は、遊びを経験し、それを展開するような機会が多くある。子どもは、遊びを通して友だちを作り、チームワークを高め、自信や競争心を身につけていく。多くの保育実践で、このような活動が取り入れられているが、こうした活動はグループにおけるリーダーシップやそれぞれの役割を果たす機会として重要である。一般的に、私たちは絵本を読み聞かせる際、年齢に応じた適切な発音・速度・声量・適切な間の取り方を知っている。単調な読み聞かせは理想的ではない。なぜなら、ストーリーを理解するという目的を考慮していないからである。一般的には、本を読むことと遊びとは結び着かない。しかし、子どもたちの注意をひくために物語のイメージを膨らませることは、遊びに共通している。読み聞かせの方法に変化をつけることで、子どもたちは物語に引き込まれ、その変化に反応するはずである。絵本には学習するためのさまざまな工夫が施されている。色や絵は言葉を理解するための素材である。理解しやすく簡単なストーリーと子どもが覚えやすい言葉で構成されている。子どもたちは、知っている言葉を見つけながら、読むことができるようになり、自信をつけていく。このように遊びとかけ離れているような絵本の読み聞かせにも、遊びの要素を結びつけることができる。このことと、今回のプロジェクトは同一線上にあるのではないだろうか。

最後に、学生たちが日本の伝承遊びで使われる歌詞を英語に翻訳した。それは、誰もが遊んだことのある慣れ親しんだ伝承遊びである。英語でこの伝承遊びを楽しむために、適切な英単語を探す必要があった。学生たちは歌詞の意味やメロディーを崩さないように話し合い、何度も歌いながら文章を調整していた。そして、グループで楽しそうに実施することができた。こうした学生たちの積極的な学びと楽しもうとする姿勢が、このプロジェクトを楽しくもあり、意味のあるものにしたのである。

5) 「保育内容演習生活と環境Ⅱ」「保育表現技術体育Ⅰ」「附属幼稚園」における連携

本節では、K大学短期大学部幼児教育学科の平成29年度の科目間連携の1つである運動遊びについて取り上げる。連携した授業科目は、「保育内容演習生活と環境Ⅱ」（2年次前期履修）と「保育表現技術体育Ⅰ」（1年次通年履修）である。本連携のねらいは、1年次で学習した運動遊びに2年次で学習した保育環境構成の視点を取り入れ、計画・実践することで、学生の

保育力をさらに向上させるということである。実際の取り組みは、「保育内容演習生活と環境Ⅱ」の授業時間を利用してK大学附属幼稚園の園庭や建物を利用し、展開された。実施計画は表1、クラス毎の班のテーマは表2の通りである。

表1 授業間連携としての「運動遊び」実施計画

月 日	場 所	内 容
平成29年 6月28日(水) 2A・2B 2C・2D	大教室	北欧の運動遊びを柴田が紹介し、本取り組みの趣旨を伊藤が説明した。その後、班を決定し、計画書を作成した。
7月3日(月) 2D・2B 7月7日(金) 2A・2C	831教室 832教室	班毎に運動遊びのための工作物を作製した。
7月10日(月) 2D・2B 7月14日(金) 2A・2C	附属幼稚園	附属幼稚園に工作物を設置し、実際に園児が運動遊びを体験した。
7月21日(金) 2A・2C	831教室	各自で振り返りシートを記入し、班毎に振り返りのポスターを作成した。

* 2D・2Bは、授業時間内に振り返りシートの記入の時間をとることができなかった。

表2 班毎の実施テーマ

クラス 班	2A	2B	2C	2D
1班	高得点を目指して ボール投げ!	けんけんぱ!	ボールでのびのび うごこう!	物と体を使って 楽しむ遊び
2班	ボールけり	ボールなげ!	ボールあそび	音に親しむ!
3班	ジャンプdeタッチ	ウッドブロックを つくろう	両手でタッチ!	ジャンプで タッチ!!
4班	足をきたえよう!	ツイスター	ボールをポーン!	ねらえパーフェクト
5班	Hit & Jump & Throw!	ジャンプでタッチ!	ボールを入れて タッチしよう!	ホップ・ステップ・ ジャンプ!
6班	<u>生き物と足腰を きたえよう!</u>		ジャンプを楽しもう!	カラーボール当て

* 下線は、動物に関する内容を含めた班である

また、本取り組みの終了後は、参加した学生に振り返りのシート(自由記述)を記入させ(図13参照)、K大学附属幼稚園教諭を対象に、アンケートを実施した(表3参照)。

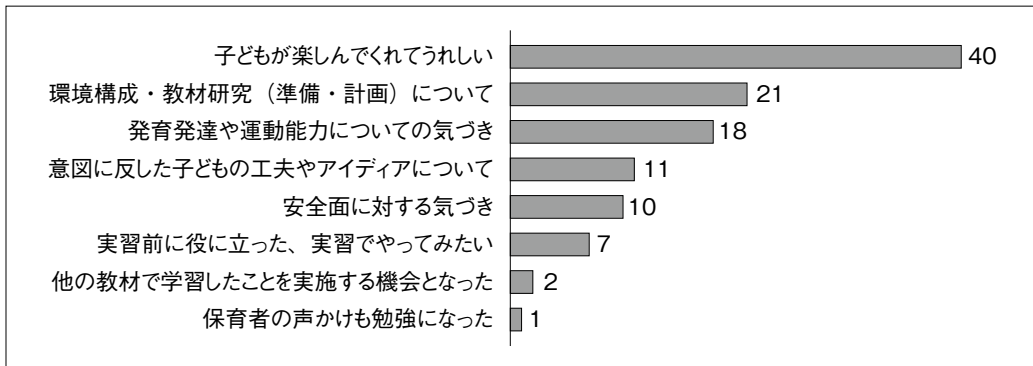


図13 振り返りシートの自由記述の内容(回答者80人、複数回答有り) 単位(人)

表3 附属幼稚園教諭対象のアンケート結果(一部のみ)

1) 良かった点
<ul style="list-style-type: none"> ・いろいろな動物の足跡に興味を持って足跡を辿り、たくさんの海の生き物がいて視覚的にも楽しんでいました。 ・ボールをうまくコントロールすることなどの経験が保育の中では意外と少ないので、ボール遊びは良い遊びだと思います。 ・足跡が人の足だけでなく、動物、恐竜の足跡などもあった点。足跡を辿るだけでなく、誰の足跡かを考えたり、お話ししたりしながら楽しむことが出来た。
2) 改善点
<ul style="list-style-type: none"> ・次々に新しく遊びに入ってくる子が増えていく中、遊び方の説明などをその都度、わかりやすいようにきちんと伝えることもできるといいと思います。よくわからないままの子や、すぐにやめてしまう子もいました。 ・ボール投げで投げる距離や高さや大きさなど、段階があると、さらに面白いと思う。 ・立体的な足跡が床との接着が完全ではなく、転倒の危険を感じた。
3) 感想・要望など
<ul style="list-style-type: none"> ・幼稚園での実施となり、参加しやすくなって良かったです。遊び方を子どもたち自身で工夫していたりする姿もあり、とても楽しそうに遊ぶ様子が見られたので、良かったです。 ・学生も実習の際に、出会った子どもたちと再び触れ合うことが出来て、子どもたちの成長を感じられていたようでした。

今回の科目間連携は、学生の自由な発想を期待した。そのため、各班での取り組みは学生に任せ、授業者からの指示は出さなかった。ただし、運動遊びを展開する幼稚園内の場所は、各班の希望を確認した上で、運動の遊びの内容を考慮して授業者が決定した。取り組みの中には、海の生き物のイラストを段ボールに貼り付けてケンケンパのゴール地点に設置した班や、様々な動物の足跡をつくって、ケンケンパの遊びを計画した班があった。これらの班は、幼稚園教育要領の領域環境のねらいの1つである「身近な環境に親しみ、自然と触れ合う中で様々な事象に興味や関心をもつ」という内容にあった取り組みができた。授業者の指示がないにも関わ

らず、幼児が運動遊びをしながら生き物に親しむことができた班といえよう。

また、振り返りシートによる学生の自由記述では、半数の学生が「子どもの楽しむ姿を見ることができてうれしい」と回答した。これは保育者にとって大切なことの1つである「子どもの目線に合わせて物事を考え、行動する」きっかけになるのではなかろうか。学生は通常の実習でいろいろな教材を考え、指導案を作成する。



図14 運動遊びの様子

しかし、前述のとおり実習中に指導案作成以外に、実習日誌の記録、教材準備等に時間・労力をさかれるため、本来子どもが持っている「いきいきとした表情」を十分に感じ取る余裕のない学生もいる。これに対し、今回の取り組みは指導案の作成などがなかったため、子どもが真剣に遊ぶ様子をうれしく感じ取る余裕が学生にあったのかもしれない。さらに、K大学附属幼稚園教諭のアンケートからも今回の取り組みを評価している意見が多数見られたが、改善点としては、安全性、公平性、ルール説明に関する意見があった。このような取り組みでケガをする幼児が出ないように、安全面に十分に配慮するように、授業者として運動遊びの直前に学生に再度注意を促す必要があった。

今回の科目間連携は、初めての取り組みであったが、授業者の期待を超える成果を修めることができた。是非、来年度以降も継続して実施していきたい。

5. おわりに

我が国の保育者養成校では科目間の連携を導入する実践は徐々に増えてはいるが、実習を中心とした科目間連携の在り方は、その有効性も含めて解明されていない。本研究では、実習を中心とした科目間連携を実践し、この有効性をフィールドワーク、質問紙調査、インタビュー調査等によって多面的に探った。その結果、次の五点が明らかとなった。第一に、学生は、一斉指導における説明や導入・展開に関連した実践的なスキルが不足している。第二に、実習前の学生の課題及び次の実習に向けての学生指導の在り方を授業担当者間で協議することは、実習指導に有効である。第三に、実習後の振り返りから、スキルを伴う保育活動では、授業で学習した内容が学生の自信不足や準備不足等が原因で、十分に生かされていない場合がある。第四に、日本の伝承遊びで使われる歌詞を学生が英語に翻訳し、グループで楽しく活動したことは、英語を取り入れた教材研究という視点から実習に有効である。第五に、幼稚園の園庭、廊下、壁面、天井などを利用した運動遊びを実践し、子どもの楽しむ姿を見て喜びを感じた学生が半数に上った。

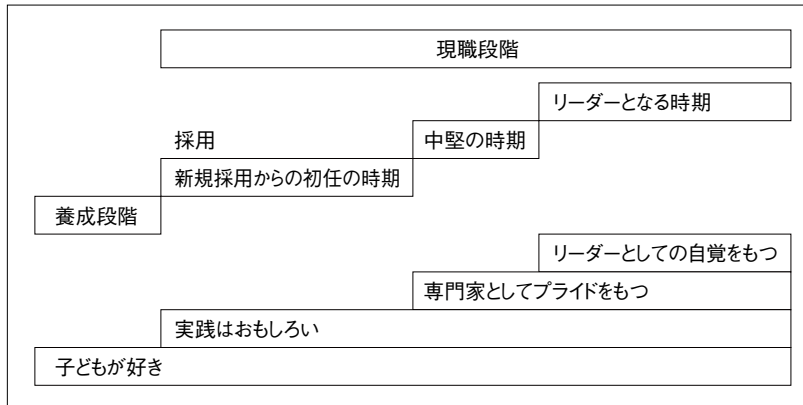


図15 幼稚園教諭・保育教諭としての成長過程

ところで、文部科学省の委託研究として一般社団法人保育教諭養成課程研究会は、「平成28年度幼稚園教諭の養成課程のモデルカリキュラムの開発に向けた調査研究—幼稚園教諭の資質能力の視点から養成課程の質保証を考える—」を報告⁷⁾している。報告では、幼稚園教諭として求められる資質能力は、幼稚園教育要領に示す5領域の教育内容に関する専門知識を備えるとともに、5領域に示す教育内容を指導するために必要な力、具体的には、幼児を理解する力や指導計画を構想し実践していく力、様々な教材を必要に応じて工夫する力等としている。幼稚園教諭を幼児期の学校教育を実践していく専門家としての側面からみていく必要があるとしている。では、保育者養成校には今後何が求められているだろうか。この報告書では、幼稚園教諭および保育教諭の望ましい成長過程を示している(図15参照)。特に、養成段階では、幼稚園教育についての基礎的な知識や理解、技能を修得することが目標であるが、「実習は大変だが、やっぱり子どもが好き」といった子どもに対する温かな関心や感情をもつことも重要である。これらの関心や感情は、養成段階からリーダーとなる時期の全ての成長過程において保育者の感情の底辺を支える要素といえよう。

本研究は、保育者養成校における実習を中心とした科目間連携に着目し、K大学短期大学部幼児教育学科の取り組みに対して考察を加えた。今後の課題として、実習を中心とした科目間連携のより具体的な学習効果を検証することに加え、その在り方について全教員で議論を重ねながら総体的に取り組む必要性が見えてきた。学生の「子どもが好き」という感情を維持しながらも、「実践はおもしろい」と思えるような保育実践の奥深さに気づき、その学びを深める機会が実習である。こうした機会を保証し「学び続ける保育者」を育成することが保育者養成校の使命であり、本研究がその一助になることを期待したい。

引用

- 1) 一般社団法人全国保育士養成協議会：平成25年度全国保育士養成セミナー報告書，190頁-191頁，2013.
- 2) 神垣彬子・伊藤智里・尾崎公彦：領域「言葉」と領域「表現」の連携授業についての一考察—保育者養成校における科目間の試験的連携—，幼年教育研究年報，第32巻，95頁-100頁，2010.
- 3) 広渡純子・讃岐京子：保育者養成カリキュラムにおける科目間連携(1)—「保育内容言葉」と「保育表現技術」の連携—，聖和論集，第40号，69頁-78頁，2012.
- 4) 智原江美・下口美帆：クロスカリキュラムによる領域「表現」の総合的実践力習得のための試み，京都光華女子大学短期大学部研究紀要，第51集，85頁-97頁，2013.
- 5) 松山由美子：保育者養成における「保育実践力」育成のための学びの場—模擬保育と学外実習に関する質問紙調査の結果からの考察—，四天王寺大学紀要，第49号，197頁-212頁，2010.
- 6) 柴田卓・石森真由子編：楽しく学ぶ運動遊びのすすめ—ポートフォリオを活用した保育実践力の探求—，みらい，2017.
- 7) 一般社団法人保育教諭養成課程研究会：平成28年度幼稚園教諭の養成課程のモデルカリキュラムの開発に向けた調査研究，2016.

